

史料紹介

新たな『胡適全集』の公刊

水羽 信男

胡適（1891-1962）は近代中国の知の巨人で、2018年に日本で使用されている高等学校の『世界史B』の全て（7種）に掲載されている。ちなみに、全国歴史教育研究協議会編『世界史用語集（改訂版）』（山川出版社、2018年）は、次のように解説している。

中国の学者。1910年にアメリカに留学、プラグマティズムの影響を受けた。……帰国後に北京大学教授となり、儒教批判を展開したが、五・四運動後はマルクス主義とは対立した。第二次世界大戦後の49年にはアメリカに亡命したが、58年から台湾に移り学術の発展に尽力した（293頁）。

だが日本での胡適研究は思いのほか少ない。たしかに論文レベルで見れば、それなりの研究があるが、たとえばタイトルに胡適を含む研究書（胡適の文章の翻訳は除く）は、国立情報学研究所のウェブサイト CiNii Books によれば、4冊。内2冊は翻訳であり、日本語によって書かれたオリジナルな研究書は2冊のみとなり、今世紀に限ると1冊もない¹。

その理由のひとつは1930年代以降、胡適が一貫して共産主義に対して批判的な立場をとり続け、その立場をハイエク（1899-1992）などを援用しながら、理論的に精緻化してきたことにある。それゆえ1949年の中華人民共和国の成立以後、彼は中国共産党から名指しの批判を受けた。マルクス主義に基づく革命運動を「正統」な近代史と見做すような歴史観において、胡適は当然軽視されることになった。

他方、新儒家ともいわれた梁漱溟（1893-1988）について、日本ではアジア的な伝統の再評価・再検討の文脈のなかで、胡適に比べると強い関心をもた

れてきた²。それは欧米起源の近代（Modernity）に対する強烈な疑義を根底におき、新たな価値の創出（ないしは復古）を目指す知的営為に導かれていた。周知のように、胡適は西歐化論者を自認し、彼がおこなった伝統批判は強烈であった。その点を 1920 年代から梁漱溟らは批判したのであり、その批判は梁漱溟に関心を寄せる今日の論者にも共有されているように思われる。

だが、国民党の一方独裁が終わって 20 年、さらなる民主主義の成熟を目指す台湾でも、また 1989 年の民主化運動とその弾圧から 30 年、習近平体制のもとで民主主義の意味が問われている中華人民共和国でも、胡適に対する関心は相変わらず根強い。それは彼が単に党派的利害から中国共産党に反対したのではなく、彼なりのリベラリズムに基づき、国民党の一方独裁に対しても批判的であったことによる。

すなわち民主化が無条件に「個の尊厳」を守るわけではなく、国家・民族・「人種」、またジェンダーなど個人の自由を拘束する鎖を裁ち切り、自由を問い直すうえで、胡適が信じたリベラリズムの価値は、台湾でも中華人民共和国でも過去の問題となっていない、ということであろう。また胡適は「整理国故」の必要性を説き、旧体詩も作る中国の文人であった。彼を中国の知的伝統のなかで理解する必要性も再認識されている。

紹介者は中国のリベラリズムを取りあげながら、胡適についてはほとんど触れてこなかった³。それは 1949 年以後も中国大陸にとどまった知識人の分析を優先したためであった。たが、日本での胡適研究も新たな展開を遂げるべき時期に来ているように紹介者には感ぜられる。それはなによりも、日本における中国近現代思想史像の再構築のために、胡適は外すことのできない重要人物であることによる。同時に胡適は根岸智代が明らかにしたように、日本の同時代の知識人との交流をもっており、日本を含む東アジア思想史のなかで胡適の思想を捉えることは、日本の思想史を理解するうえでも重要だからである⁴。付言すれば、グリーダーは胡適に即して「自由主義が有益なのは、それが社会の変化に最も敏感に対応しうる考え方だからだ」、と指摘したが、この点を加藤陽子は強調している⁵。言うまでも無く、それは近代中国に限定されることではなかろう。

その意味で 2018 年に台湾の中央研究院近代史研究所胡適紀念館から公刊

された『胡適全集』二種——『胡適中文書信集』全5冊・『胡適時論集』全8冊は、時宜にかなったものだと言えよう（以下、胡適紀念館版）。以下、主編の潘光哲から得た情報も含めて、胡適紀念館版の特徴を簡単に紹介しておく。なお潘は中央研究院近代史研究所の研究員で、胡適紀念館の館長である。

まず第一に紹介しておくべき点は、季羨林が主編となった『胡適全集』（安徽教育出版社、2003年、以下、安徽版）全44巻との関連である。安徽版がこれまで最も精緻な決定版とみなされてきた。だが安徽版については、政治的な配慮から胡適の反共的な言説が削除され、また新たに発見された史料に基づく補綴が必要なのが指摘されている。それゆえ中央研究院が、胡適の死後50周年の2012年2月に新全集の編集を企画し、翌年1月から正式な作業を始めた。

胡適紀念館版の「序」で潘光哲は、「もっとも欠けることのない（削除の全くない）、そして最も精緻で正確な（各種の版本をとりまとめ校訂を行った）胡適のテキスト」を提供することを目指している。胡適は自身の学生であった楊聯陞(1914-1990)に対して、学生が恩師に替わって文学作品を編集する際には、「自己の判断力を用いて」取捨選択し、「勝手にどんなものでもみな収録するようなことはしてはいけない」と諫めていたというが、潘はそれは胡適の提起した学問の手法とは異なるとする。そして今回の編集作業はあらゆる史料を収集すべきだとする、胡適の方法に従うのであり、胡適の願いには完全に背反すると宣言した。

すなわち胡適紀念館版は安徽版を底本とし、史料の来源と初出を明示し、版本間の異同も注記して、誤字・別字・衍字についても補訂する旨が凡例において記されている。そのうえで『胡適時論集』では、胡適自身が専著に収録したものは収録せず、胡適の英文原稿を翻訳した文章については、著作権の問題をクリアーできたものを収録し、できなかったものはタイトルのみをあげるとした。

具体的には、たとえば『胡適時論集』第1巻の「(時評) 二辰丸的軍火日本贏呢中国贏呢」(『競業旬報』第11期、1908年4月、24-25頁)は、安徽版には収録されていない新出史料である。このエッセーは、1906年10月28日から1909年2月まで上海において競業学会が発行し、胡適も編集に加わ

った『競業旬報』の欠落部分の「発見」の成果であった（ただし以前でも『競業旬報』の一部は閲覧可能であり、安徽版にもこの雑誌に掲載された胡適の文章が収録されている）。

『胡適中文書信集』では、安徽版には未収録の、しかし公刊されている書信が網羅的に収められている。たとえば曹伯言整理『胡適日記全集』（聯經出版事業、2004年）や、『胡適雜記』など4種類を集めた『胡適留學日記』手稿本（世紀出版集團上海人民出版社、2015年）等々に収録された書信が逐一集められた。また胡適紀念館がウェブサイトで公開している檔案に含まれる場合は、「館藏号」が明示された⁶。こうした配慮も利用者の利便性を高めている。また国史館が新たに公開した、胡適の駐米大使時代（1938-1942）の電文や、中華人民共和国の改革開放以後のオークション熱のなかで競売に付された胡適の書簡も収録しているとのことである。

その意味で胡適が書いた書信については、今日、考え得る完成版が作られたと言ってよかろう。しかし当然だが、往復書簡の場合は相手方の手紙の内容が分からないと十分な理解はできない。著作権の関係などもあり、胡適への来信の収録が困難であることは十分承知しているが、研究の面では時に隔靴搔痒の感もある。この点を補う史料集としては、萬麗鵲編註『萬山不許一溪奔：胡適雷震來往書信選集』（中央研究院近代史研究所、2001年）や、中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室編『胡適來往書信選（上、中、下）』（社会科学文献出版社、2013年）、さらには北京大学信息管理系／胡適紀念館編『胡適王重民先生往來書信集』（国家図書館出版社・安徽教育出版社、2009年）などが役に立つ。

今後の胡適紀念館版の出版計画としては、①単行本の復刻のほか、②『胡適文存』、③『胡適韻文集』、④『胡適日記』、⑤『胡適文章編年』、⑥『胡適中文著訳繫年』が予定されているとのことである。②については、1953年の遠東圖書公司版（全4集）を底本とし、それ以前の版本から削除された文章は、時論集および⑤での対応を予定するという。⑤は胡適が自ら編んだ「文存」や単行本、そしてテーマ性のある「書信」「時論」「日記」「韻文」に分類できないものを収録するものである。

ところで周知のように胡適には英文の文章もあるが、これらの全集への収

録は中文版の編集を待って、ということのようである。その間は周質平の『胡適英文文存』(遠流出版事業、1995年)と『胡適未刊英文遺稿』(聯經出版事業公司、2001年)を参照することとなろう。いずれにしても胡適研究に関する史料的条件は十分に熟したとも言える。これらの諸史料を駆使した、新たな日本の胡適研究の発展を祈念して擱筆する。

-
- 1 尾坂徳司『政治と文学の交点・胡適から魯迅へ』法政大学出版局、1957年、林毓生／丸山松幸・陳正醜訳『中国の思想的危機：陳独秀・胡適・魯迅』研文出版、1989年、山口榮『胡適思想の研究』言叢社、2000年、ジェローム・B.グリーダー／佐藤公彦訳『胡適 1891-1962：中国革命の中のリベラリズム』藤原書店、2018年(原著は1970年出版)の4冊である。その他、陳玲玲『20世紀中国におけるイブセン受容史上の魯迅と胡適』(出版地不明、2006年)もある。
 - 2 さしあたり中尾友則『梁漱溟の中国再生構想：新たな仁愛共同体への模索』研文出版、2000年や、湯本國穂「新たな中国文明と社会の創造：梁漱溟」『千葉大学法学論集』第24巻第3・4合併号、2010年など10編を超える湯本の関連論文を参照されたい。
 - 3 水羽信男／鄭曉琳訳「中国自由主義者的分岐：1930年代的胡適和羅隆基」潘光哲主編『胡適与現代中国的理想追尋：紀念胡適先生120歳誕辰國際學術研討會論文集』秀威資訊科技股份有限公司、2013年。
 - 4 根岸智代「「日中問題」言説の交錯：胡適・室伏高信及び芳澤謙吉との論争とその影響を中心として」『洪沢研究』第23号、2011年。
 - 5 加藤陽子のグリーダー翻訳本に対する書評(『毎日新聞』2018年5月13日)。
 - 6 胡適紀念館(<http://www.mh.sinica.edu.tw/koteki/>)が公開する史料には、写真や音像史料もある。なお後者については『胡適的声音：1919-1960：胡適講演集』(広西師範出版社、2005年)も参照のこと。